

## University Club Activities and Student Culture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜島, 幸司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/844">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/844</a>

## 「部・サークル活動」と大学生文化

浜島 幸司

### 1. はじめに

本稿は大学生文化研究において正課外活動のひとつである「部・サークル活動」<sup>1)</sup>に注目する。近年の大学改革は正課（大括りでいえば学士課程教育の改善）中心であるが、大学生にとって正課外活動も学生生活を構成する要素となりうる。そこで正課外活動に関わる（あるいは関わらない）大学生たちの態度と意識を正課である学業（勉強）と絡めて把握し、大学生文化の分化の有無を確認したい。

現代の大学生にとって「部・サークル活動」とはどのような位置を占めているのか。また、大学内で「部・サークル活動」が果たす役割を大学生文化の分化の側面から考察する。

### 2. 問題関心

大学生の「部・サークル活動」を大学生文化研究の中にどのように位置づけることができるのだろうか。長年、大学生文化を研究してきた武内（2015）は学生文化の類型を図1のように示している。学問へのコミットメントが進むと「アルバイト型」、「サークル型」から「学問型」、「勉強型」の学生文化となる。一方、大学へのコミットメントが進むと「学問型」、「アルバイト型」から「勉強型」、「サークル型」の学生文化となる。数多くの大学生調査を実施し、多様な大学生の意識と実態を明らかにしてきた武内からすれば、現代の大学生文化が「勉強型」に特化していくのではないかとの「読み」がある。

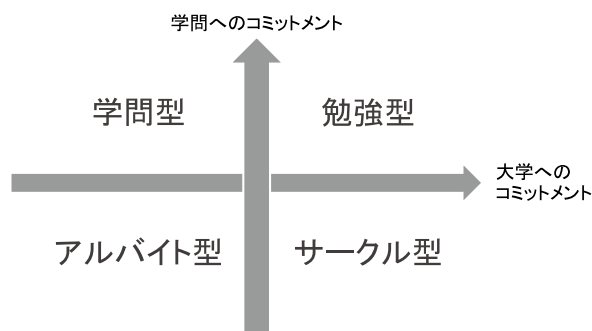


図1 学生文化の類型

（武内（研究代表）、2015:173）注：初出は（武内編、2003:170）。

確かに昨今の大学改革は学業（勉強）とりわけ正課科目を中心にしたものが多い（浜島、2017）。この流れを受けてか、実際に大学生たちは授業にまじめに出席している。彼らが「生徒化」しているとの分析もある（岩田、2015）（黒河内、2015）。また、2000年代に

入ってから大学生が大学に滞在する時間が長くなってきている（浜島、2014）。しかし、これらのことによって大学生にどのような変化、とりわけ個々の学生に学習成果があらわれたのかについてはもちろん研究の蓄積<sup>2)</sup>はあるものの明確に示されている状況ではない。

当然ながら学業（勉強）に関する研究も今後進められていく必要はあるが、ここでは大学へのコミットメントに示されたもうひとつの「サークル型」に注目していきたい。正課ではない「部・サークル活動」もまた大学生文化を検討するうえで見過ごすことのできない活動である。学業（勉強）をフォーマルな大学生文化と位置づけた場合、「部・サークル活動」はインフォーマルな大学生文化と位置づけることができる。インフォーマルな大学生文化の現状と課題を検討していきたい。

本稿は以下のように進めていく。まず、大学生の「部・サークル活動」に関わるこれまでの諸研究を参照する。この研究蓄積を確認したうえで、「部・サークル活動」を大学生文化研究としてとらえる視点（分析枠組み）を提示する。先に示しておく、「部・サークル活動」への加入状況および比重をインフォーマルな大学生文化へのコミットメント指標として用意する。さらにフォーマルな大学生文化へのコミットメント指標を学業（勉強）比重として、これらフォーマルとインフォーマルの関わりを組み合わせることで活動比重のタイプを作成する。タイプ別に学生生活、意識の分化の有無を確認する。分析枠組みにそってデータを分析し、大学生文化研究において「部・サークル活動」が果たす役割を考察する。

### 3. 大学生の「部・サークル活動」に関わる研究

大学および大学生の「部・サークル活動」に関わる研究はそれ自体がひとつの単独領域とまではいかないが、複数の研究分野で取り上げられている。

大学生文化研究としては、すでに岩田と黒河内による実績がある（岩田、2003）（岩田・黒河内、2010）（岩田、2011）。これらは社会変動の視点から日本の大学生の文化的志向性が勉強からサークル（遊び）へ移行したことを主に全国大学生生活協同組合連合会が毎年実施している「学生生活実態調査」<sup>3)</sup>の結果を経年にわたって丁寧に分析している。具体的には1960年代から2000年代の調査データをもとに大学生の読書時間および書籍費は経年で大きく減少した一方で、その間サークル活動者は増えていることを検証している。

同じく大学生文化研究では武内・浜島（2003）がある。1997年に大学生への調査をした一時点のデータではあるが、「部・サークル活動」参加者の実態を把握したうえで、活動に関するいくつかの項目と他の学生生活および意識や満足度の項目を比較している。その結果、活動従事者および熱心に活動している学生ほど大学内で適応、充実していることを確認している。

心理学的な立場から、活動集団内での学生たちの態度（コミットメント）に焦点を当てたものとして高田（2014および2015）がある。インタビューとアンケート調査をもとに「サークル集団」<sup>4)</sup>に対する学生の肯定的態度（「集団への親近」、「集団への責務」、「集団への妥協」）と否定的態度（「集団からの離脱」、「集団での日和見」、「集団での萎縮」）を導出した。このような関わり方が学生生活へ大きな影響を及ぼすものと論じている。青年の社会

心理、人間関係を検討するうえで、「部・サークル活動」への視点の有用性を説く。また、北本・茂呂（2017）は集団内コミュニティ維持の仮説生成のため実際に活動学生へのインタビューをおこなっている。

青年社会学の立場からは、大学生のみを対象としていないものの浅野（2011）や辻（2016）の研究がある。個人が趣味を媒介にして、特定の組織もしくはグループに加入することで、そこで交友関係を広げたり、社会関係を活発化させたりする。「趣味縁」を通じて、若者が社会と接点をもつこと、他者とのコミュニケーションが強まる（深まる）ことが論じられている。また、山口（2015）は趣味を通じた大学生の生活実態とりわけ勉強面、交友面についてインタビューから明らかにしている。

大学教育との関連では、まず大学内での居場所や大学への適応に関して「部・サークル活動」所属による効果が量的調査から検討されている。所属大学への居場所感については「サークル活動場面」をアンケート調査項目に入れて、1年次学生に「精神的安定」が高いことを谷淵（2015）は指摘している。田澤・梅崎（2011）も1年次学生の「部・サークル活動」への加入が大学へ適応していることを調査結果から明らかにしている。小西・野沢（2013）は場所愛着評定尺度と呼ぶ項目を用いて、サークルへの所属といった大学への「高関わり群」ほど、場所愛着が高いことを確認している。また、動機という側面から赤間（2013）は学業、交友、その他の活動への関わりが重要だと述べている。

大学教育の成果という側面からは、「部・サークル活動」への参加ではなく、正課外活動への関わりから検討がなされている。量的調査からは、清水・三保（2013）がクラブ・サークル活動およびアルバイト経験者に「社会人基礎力」で示されることの規律性・状況把握力・主体性・柔軟性などに関係があると分析している。泉谷・山田（2013）は愛媛大学のスチューデント・キャンパス・ボランティアという課外活動を事例に、①この活動に参加する学生は「他者および集団・組織のために役立つとすること」と「目的の達成のために多様な人と協働すること」の2項目の平均点が高いこと、②彼らは大学生活全体にも充実感を感じていることを指摘している。時任・久保田（2012）では、大学卒業生に大学時代の正課外活動の取組が自分の進路決定や自己成長の語りとして重要視されていることをインタビューから明らかにしている。この論文での課外活動の主な取組が高校へのボランティアということもあり、スキル養成というよりも学生と教師との協働活動の場をもつことに効果があったと述べている。このように正課外活動への参加は学生の成長を促す効果がみられる。

大学と職業との接続についても、松繁（2005）は「体育会」経験学生が就職活動に有利かどうかという側面から触れている。体育会に参加する固有の学生に備わった資質だけでなく、固有の大学組織と企業とのネットワーク関係、たとえばOB・OG関係に埋め込まれた雇用慣行などといったテーマと重なってくる（大島、2012）。

このように大学および大学生の「部・サークル活動」（さらにそれ以外の正課外活動を含めた研究もあるが）は独立した研究分野とはならなくとも、多様な側面からその効果および分析可能性に触れられていることがわかった。参照したそれぞれの研究はアンケートであれ、インタビューであれ、大学生らの声を収集して現状を分析していることもわかった。総じていえば、「部・サークル活動」を含む正課外活動はそれ自体だけでなく、他の学生生活

とも大きく関わりをもち大学生文化を研究するうえで非常に重要な役割を果たすものといえる。

しかし、先行研究には欠けている視点もある。それは「部・サークル活動」のみに関心を寄せた場合に顕著であるが、「部・サークル活動」への有無による他の生活、態度の違いを「単線的」にしか明らかにできないことだ。もちろん、そういった研究の意義も認められるけれども、「部・サークル活動」に関わる多様な学生を「複線的」な視点で把握することはできていない。具体的に示せば、正課外活動比重の違いであるとか、正課活動への比重や両立の状況などから、彼らの学生生活にどのような差異があるのかを検討するためには「複線的」な視点を用意しなければならない。これまでの「部・サークル活動」に注目する研究には、大学生文化がどのように分化しているのかへの関心はなかったといえる。そこで本稿は正課外活動、とりわけ「部・サークル活動」に注目することで、大学生文化の分化を探る手がかりとなることを提唱し、実証的にその有無を確認していく。

実のところ、冒頭で提示した武内の図1は学生文化が「勉強型」に移行する時代の風潮を示しているだけではない。ある一時点のみを取り出して、その時の大学生の多様な姿を分類する際の指標にもなりえている。この図は大学生文化の分化に注目し、実証することも十分意義をもつものと考えられる。浜島(2017)は学生文化の分化について以下のように述べている。

教学改革で目指されているのはおそらく「勉強型」のほうであろう。「勉強型」の学生文化を政策的に誘導している向きがあるとはいえ、何度も繰り返すが学生文化は多様であり、分化している。それぞれの文化形態、型に得意／不得意な要素が備わっている。大学全体のことを考えれば、お互いの特性を活かしてこそ、共生もしくは発展がみられるのではないだろうか。

(浜島、2017：89)

#### 4. 「部・サークル活動」から大学生文化の分化を探る

大学生文化の多様化を探るためにも、個々の学生が従事する活動の有無および比重とその組み合わせ(タイプ)を把握することが必要となる。「部・サークル活動」でいえば、そもそもそこに加入しているのか否かが問われる。また加入していたとしても、相当な比重を割いているのか、もしくは「ほどほど」の活動をおこなっているのかといった活動者間での差異がある。そこに正課である学業(勉強)への比重のありようと重ねることで、その学生の正課・正課外への学生生活への構えを確認することができる。

このように「部・サークル活動」に参加していない、「部・サークル活動」に参加しているが比重は低い、「部・サークル活動」に参加していて比重は高い、と3分類したグループに対し、さらに学業(勉強)比重は高い／低いかどうかについても確認する。この組み合わせで生じる6タイプがどのような学生生活を送っているのかを探ることで大学生文化の多様化を検討することができる。

学生の活動比重をタイプ化する方法はすでに「コミュニティとしての大学」を測定する目的のもとで8タイプ(交友比重[高低]×学業(勉強)比重[高低]×部・サークル活動比重[高低]の組み合わせ)を作成して、大学への帰属意識を検討したものがある(大島・伊藤・浜島、2007)<sup>5)</sup>。この分析では大学生文化の多様化ではなく、どのタイプに大学への帰属意識が高いのかが検討課題であった。その結果、すべて比重が高い学生ほど大学への帰属意識が高く、すべて比重が低い学生とは大きな差がみられるという知見が得られている。この8タイプにおいては「部・サークル活動」に参加していない学生は一律に比重が低いとみなして(参加していないのだから比重の置きようがないと判断できるため)分析に含めていた。参加していない学生独自の生活、意識があることも見逃してはならない。さらに交友比重をタイプに含めてしまうと細分化されすぎてしまう。今回、交友比重はタイプ作成から除外する。

これまで使用してきた活動比重8タイプを変更したうえで、データ分析をおこなう。

## 5. 使用するデータ

使用する調査データは「大学生文化研究会」(代表:武内清)が実施した大学生生活実態調査に回答した1771名である。すでに調査報告書が刊行されている(武内(研究代表)、2015)。現時点において直近の大学生の意識と実態を把握できる貴重なデータとして再分析する<sup>6)</sup>。

調査大学、対象、期間、方法は下記のとおりである。

調査大学:14大学(国立4校、私立大学10校)

調査対象:人文・教育・社会科学系学部に所属する大学生

調査時点:2013年9月~12月

調査方法:授業時に学生に記入してもらう自記形式(一部持ち帰り方式)

## 6. 結果

### 6.1. 「部・サークル活動」加入状況

まずは、本調査に回答した学生たちの「部・サークル活動」への加入状況、加入者のみには参加種別と活動比重について確認しておこう。表1は全体および回答大学別に加入の有無と加入者のみに対して参加種別と活動比重を集計したものである。

加入の有無については、全体の74.2%が「加入中」である。加入していない学生のうち、「最初から未加入」は14.5%、「途中で辞めた」は11.3%である<sup>7)</sup>。大学別で加入状況に差異がみられる。80%以上が「加入中」の大学(A、C、二、ホ)もあれば、50%以下の大学(ロ)もある。もちろん、本調査は各大学の学生を無作為に抽出したものではない。大学による差とは言い切れないが、所属大学によって違いがあることを確認できる。

「加入中」の学生のみに参加種別を尋ねると、全体では多い順から「文科系の部、サークル」

(35.5%)、「運動系のサークル（同好会）」(27.0%)、「社会活動関係の部、ボランティア団体等」(18.4%)、「運動系の部（体育会）」(18.0%) となっている。大学による参加種別の割合も差異が確認できる。「運動系の部（体育会）」が50%を占める大学（D）もあれば、「社会活動関係の部、ボランティア団体等」が80%を超える大学（ホ）もある。

同じく「加入中」の学生のみ「部・サークル活動」への学生生活の比重を尋ねると、全体では「高い」が59.2%と半数を超えている。6割近くの学生が「部・サークル活動」に力を入れていると回答している。大学による参加比重の差異も確認できる。「高い」が70%を超える大学（A、D、ニ、ホ）もあれば、「低い」が50%を超える大学（W、Z）もある。

表1 全体・大学別 「部・サークル活動」加入の有無・参加種別・活動比重

回答者 N		1761	127	187	114	174	219	187	95	144	102	89	133	84	64	42
大学名		全体	A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
加入の有無	加入中	74.2%	84.3%	84.5%	72.8%	74.7%	78.1%	76.5%	65.3%	70.8%	55.9%	76.4%	73.7%	39.3%	81.3%	100.0%
	途中で辞めた	11.3%	7.9%	9.1%	14.0%	16.1%	13.7%	12.8%	15.8%	8.3%	11.8%	6.7%	12.8%	10.7%	4.7%	0.0%
	最初から未加入	14.5%	7.9%	6.4%	13.2%	9.2%	8.2%	10.7%	18.9%	20.8%	32.4%	16.9%	13.5%	50.0%	14.1%	0.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	加入者のみ N	1310	107	157	83	129	170	143	63	107	57	68	97	33	54	42
大学名		全体	A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
参加種別	運動系の部(体育会)	18.0%	26.2%	15.8%	50.6%	18.5%	5.3%	24.5%	1.6%	21.6%	3.5%	7.4%	22.4%	33.3%	13.5%	4.8%
	運動系のサークル(同好会)	27.0%	17.8%	32.3%	14.5%	16.9%	50.3%	29.4%	19.4%	16.7%	42.1%	45.6%	19.4%	6.1%	28.8%	2.4%
	文科系の部、サークル	35.5%	49.5%	31.6%	22.9%	51.5%	27.5%	28.0%	59.7%	35.3%	35.1%	8.8%	49.0%	33.3%	50.0%	7.1%
	社会活動関係の部、ボランティア団体等	18.4%	6.5%	20.3%	12.0%	12.3%	15.8%	16.8%	19.4%	23.5%	14.0%	36.8%	8.2%	24.2%	7.7%	83.3%
	その他	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	1.2%	1.4%	0.0%	2.9%	5.3%	1.5%	1.0%	3.0%	0.0%	2.4%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
活動比重	「高い」(「大部分」+「かなり」)	59.2%	80.4%	61.1%	71.1%	58.1%	54.7%	58.7%	52.4%	52.3%	21.1%	47.1%	56.7%	60.6%	72.2%	85.7%
	「低い」(「少し」+「ほとんどなし」)	40.8%	19.6%	38.9%	28.9%	41.9%	45.3%	41.3%	47.6%	47.7%	78.9%	52.9%	43.3%	39.4%	27.8%	14.3%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 6.2. 学業（勉強）比重との組み合わせ

前述した「部・サークル活動」に参加していない、「部・サークル活動」に参加しているが比重は低い、「部・サークル活動」に参加していて比重は高い、と3分類したグループに、さらに学業（勉強）比重は高い／低いかどうかを組み合わせた6タイプを確認しておく。全体および性別、学年別の構成割合を表2に示した。

表内の(+)は活動比重が「高い」ことを意味し、(-)は活動比重が「低い」ことを意味する。部・サークル活動(なし)は回答時に「加入していない」ことを示す。全体の構成割合が多いのは「部・サークル(+) 勉強(+）」(22.5%)、「部・サークル(+) 勉強(-)」(21.4%)、「部・サークル(-) 勉強(+）」(18.2%)とこの3タイプで6割を占めている。この3タイプに「部・サークル(なし) 勉強(+）」(17.2%)を加えたタイプが、「部・サークル活動」もしくは学業（勉強）への高い比重を置いている学生たちである。その一方で「部・サークル活動」の比重が低い、または加入しないで、学業（勉強）比重も低い大学生が2割ほどいることにも留意しておきたい。

男女差もみられるが、学年別では学年が上がると「部・サークル (+) 勉強 (+)」タイプ (双方高い比重をもって両立している学生) が少なくなっている。

表2 全体・性別・学年別 「部・サークル活動」比重状況と勉強比重6タイプの構成割合

	全体	性別		学年			
		男	女	1年	2年	3年	4年
部・サークル (+) 勉強 (+)	22.5%	25.5%	20.7%	26.3%	23.4%	17.9%	14.7%
部・サークル (+) 勉強 (-)	21.4%	26.6%	18.2%	25.6%	19.4%	20.7%	17.6%
部・サークル (-) 勉強 (+)	18.2%	15.5%	19.9%	18.5%	20.8%	11.4%	18.8%
部・サークル (-) 勉強 (-)	12.0%	10.8%	12.7%	14.1%	9.9%	11.1%	15.3%
部・サークル (なし) 勉強 (+)	17.2%	13.2%	19.6%	10.2%	18.1%	25.6%	20.6%
部・サークル (なし) 勉強 (-)	8.7%	8.4%	8.8%	5.3%	8.3%	13.3%	12.9%
N(100.0)	1754	666	1086	567	684	324	170

### 6.3. 他の大学生生活比重との比較

「部・サークル活動」と学業 (勉強) への活動比重の他にも学生生活の比重について尋ねている。5つの活動について6つのタイプの比重が「高い」と回答した割合を示したものが表3である。全体で活動比重が高いのは「友人との交友」(67.5%)、「アルバイト」(49.5%)、「趣味」(49.4%)で約半数の回答である。「異性 (恋人) との交際」(25.3%)、「就職活動」(11.7%)は多いとはいえない。

6タイプの特徴をみると、「部・サークル (+) 勉強 (+)」の比重が高い活動として「友人との交友」、「異性 (恋人) との交際」、「就職活動」がある。「部・サークル (+) 勉強 (-)」も同様に「友人との交友」、「異性 (恋人) との交際」の比重が高い。「部・サークル (-) 勉強 (-)」も「友人との交友」の比重が高い一方で、「アルバイト」の比重が高い。「部・サークル (なし) 勉強 (+)」と「部・サークル (なし) 勉強 (-)」は「アルバイト」、「趣味」、「就職活動」の比重が高くなっている。

表3 比重6タイプ別 大学生生活比重5項目

	「高い」%	友人との交友	アルバイト	趣味	異性 (恋人) との交際	就職活動
部・サークル (+) 勉強 (+)	<b>77.2%</b>	43.9%	46.8%	<b>27.6%</b>	<b>15.9%</b>	
部・サークル (+) 勉強 (-)	<b>69.9%</b>	49.2%	49.3%	<b>28.0%</b>	6.5%	
部・サークル (-) 勉強 (+)	64.5%	48.4%	44.5%	23.8%	11.0%	
部・サークル (-) 勉強 (-)	<b>67.6%</b>	<b>51.7%</b>	47.1%	21.4%	6.2%	
部・サークル (なし) 勉強 (+)	58.8%	<b>52.5%</b>	<b>53.0%</b>	21.7%	<b>15.9%</b>	
部・サークル (なし) 勉強 (-)	59.6%	<b>58.6%</b>	<b>62.7%</b>	<b>28.2%</b>	<b>14.6%</b>	
全体	67.5%	49.5%	49.4%	25.3%	11.7%	

全体よりも高い数値に太字



大学内での活動比重が高いことと交友比重が高いこと、「部・サークル活動」に参加しないもしくは活動比重が低いとアルバイトや趣味の比重が高いこと、のように学生生活の分化を確認することができる。

#### 6.4. 活動時間との比較

4つの活動についてふだんの日（平日）の活動時間についても尋ねている<sup>8)</sup>。6タイプ別の平均時間と標準偏差を算出したものが表4である。全体で「スマートフォン・携帯電話」（151.1分）、「アルバイト」（151.0分）、「本を読む」（32.5分）、「授業の予習・復習」（26.8分）と読書や勉強の時間は多く費やされているとはいえない。

6タイプの特徴をみると、「部・サークル（+）勉強（+）」の活動時間が長い活動として「本を読む」、「授業の予習・復習」がある。学業（勉強）比重が高い学生に読書・勉強時間が長いことがわかる。一方、「部・サークル（+）勉強（-）」、「部・サークル（-）勉強（-）」、「部・サークル（なし）勉強（-）」は「スマートフォン・携帯電話」が長い。また、「部・サークル（-）勉強（-）」、「部・サークル（なし）勉強（-）」は「アルバイト」時間が他の4タイプと比べて長くなっている。

「部・サークル活動」に比重を置くか、勉強（学業）に比重を置くかで活動時間に分化がみられる。ただし、「部・サークル（+）勉強（+）」タイプは「部・サークル（なし）勉強（+）」タイプほど読書・勉強に時間を費やしていないが、「部・サークル活動」に参加しないもしくは活動比重が低い学生と比べて時間を長く費やしており、両立に向けた動きをみてとれる。

表4 比重6タイプ別 平日の活動時間（平均：分）

		スマートフォン・携帯電話	アルバイト	本を読む	授業の予習・復習
部・サークル(+) 勉強(+)	平均	143.5	134.9	<b>33.6</b>	<b>35.6</b>
	標準偏差	78.40	101.57	45.02	44.17
部・サークル(+) 勉強(-)	平均	<b>155.7</b>	144.0	25.6	11.7
	標準偏差	74.94	101.76	42.85	23.51
部・サークル(-) 勉強(+)	平均	140.9	<b>152.7</b>	<b>37.2</b>	<b>34.0</b>
	標準偏差	73.97	98.81	50.17	41.52
部・サークル(-) 勉強(-)	平均	<b>161.5</b>	<b>176.3</b>	23.4	10.6
	標準偏差	72.64	92.64	37.55	21.60
部・サークル(なし) 勉強(+)	平均	147.0	<b>151.8</b>	<b>43.8</b>	<b>45.7</b>
	標準偏差	82.26	100.94	56.83	56.07
部・サークル(なし) 勉強(-)	平均	<b>175.1</b>	<b>170.3</b>	27.2	10.3
	標準偏差	73.28	98.42	49.76	20.16
全体	平均	151.1	151.0	32.5	26.8
	標準偏差	77.02	100.45	47.85	41.16

全体よりも高い平均値に太字

## 6.5. 大学観との比較

5つの大学観<sup>9)</sup>についても尋ねている。全体の回答割合が多いほうの選択肢と数値を掲載したものが表5である。

6タイプの特徴をみると、「部・サークル (+) 勉強 (+)」の回答が多い項目は「大学観 B (単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい)」、「大学観 D (大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい)」、「大学観 E (学生の生活や学習について、学生の自主性にまかせたほうがよい)」がある。「部・サークル (+) 勉強 (-)」と部・サークル (-) 勉強 (+)」も「大学観 D (同)」、「大学観 E (同)」の回答が高い。一方で、学業 (勉強) 比重が低い「部・サークル (+) 勉強 (-)」、「部・サークル (-) 勉強 (-)」、「部・サークル (なし) 勉強 (-)」は「大学観 A (大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である)」、「大学観 C (出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ)」の回答が高い。

大学内での活動比重をどこに置いているかによって、大学観も異なる。

表5 比重6タイプ別 大学観

	A 大学は学問より さまざまな体験 をする場である	B 単位を取るのが 大変でも、自分 の興味のひかれ る科目を選択し たい	C 出席が少なく ても、試験やレ ポートがよけれ ば、良い成績を 与えるべきだ	D 大学の授業は、 好きなことが学 べて、知的刺激 になればよい	E 学生の生活や学 習について、学 生の自主性にま かせたほうがよ い
部・サークル (+) 勉強 (+)	49.6%	<b>78.4%</b>	52.2%	<b>57.0%</b>	<b>83.2%</b>
部・サークル (+) 勉強 (-)	<b>73.1%</b>	59.2%	<b>63.1%</b>	<b>58.7%</b>	<b>83.7%</b>
部・サークル (-) 勉強 (+)	41.5%	<b>76.7%</b>	44.3%	<b>54.7%</b>	<b>83.0%</b>
部・サークル (-) 勉強 (-)	<b>70.4%</b>	52.2%	<b>56.9%</b>	48.8%	79.5%
部・サークル (なし) 勉強 (+)	33.7%	<b>73.6%</b>	49.2%	50.3%	82.1%
部・サークル (なし) 勉強 (-)	<b>64.9%</b>	57.0%	<b>62.8%</b>	52.7%	81.8%
全体	54.2%	68.2%	54.0%	54.4%	82.5%

全体よりも高い数値に太字

## 6.6. 価値観の変化との比較

大学に入ってから価値観の変化があったかどうかとも尋ねている。その結果が表6である。全体のおよそ8割が「変わった」と回答している。「変わった」が多いタイプは「部・サークル (+) 勉強 (+)」(81.8%)、「部・サークル (-) 勉強 (+)」(81.4%)、「部・サークル (+) 勉強 (-)」(78.6%)である。とくに「かなり変わった」の回答が多い。一方で、「部・サークル (なし) 勉強 (-)」の「変わらない (ほとんど+ぜんぜん)」の回答が目立つ。

大学内で「部・サークル活動」への比重が高いこと、もしくは学業 (勉強) への比重が高いことと価値観の変化があったこととは関係がみられる。

表6 比重6タイプ別 価値観の変化について

	N (100.0)	感じ方や考え方(価値観)が変わりましたか				「変わった」 小計
		かなり 変わった	すこし 変わった	ほとんど 変わらない	ぜんぜん 変わらない	
部・サークル(+) <b>勉強(+)</b>	391	<b>32.2%</b>	<b>49.6%</b>	16.6%	1.5%	<b>81.8%</b>
部・サークル(+) <b>勉強(-)</b>	373	<b>29.5%</b>	49.1%	<b>19.0%</b>	2.4%	<b>78.6%</b>
部・サークル(-) <b>勉強(+)</b>	318	<b>34.9%</b>	46.5%	15.7%	2.8%	<b>81.4%</b>
部・サークル(-) <b>勉強(-)</b>	210	19.0%	<b>52.4%</b>	<b>23.8%</b>	<b>4.8%</b>	71.4%
部・サークル(なし) <b>勉強(+)</b>	299	26.4%	<b>50.5%</b>	18.1%	<b>5.0%</b>	76.9%
部・サークル(なし) <b>勉強(-)</b>	152	20.4%	<b>50.0%</b>	<b>23.0%</b>	<b>6.6%</b>	70.4%
全体	1743	28.5%	49.5%	18.6%	3.4%	78.0%

全体よりも高い数値に太字

## 7. まとめと考察

### 7.1. まとめ

大学生文化の多様化を探るべく、「部・サークル活動」と学業(勉強)の比重を組み合わせた6タイプを用意し、調査データを分析した。「部・サークル活動」を中心に明らかになったことをまとめる。

まず、2013年に実施した調査データからも「部・サークル活動」への加入状況および活動比重は一律ではないことがわかる。加えて、学業(勉強)比重も高低があり、「部・サークル活動」への加入状況と活動比重とを組み合わせた6タイプを用意してみても、それぞれ分化していた。男女別、学年別にみても分化がみられており、大学生たちの多様な関わり方がみてとれる。

次に、活動比重や活動時間を比較してみると6タイプの傾向がわかる。「部・サークル活動」に比重を置くか、学業(勉強)に比重をどう置くかによって、「友人との交友」、「アルバイト」、「趣味」への比重の置き方に違いがある。同様に活動時間についても「スマートフォン・携帯電話」、「アルバイト」、「本を読むこと」、「授業の予習・復習」にどれだけ長く費やしているのか違いがみられる。

さらに、大学観や価値観の変化といった意識を比較してみても6タイプの傾向がわかる。学業(勉強)比重が高い学生は勉強中心の大学観をもつ傾向があるが、そこに「部・サークル活動」への比重の違いによる分化もみられる。価値観についても比重の高い活動があるタイプに「変わった」が多い。

このように「部・サークル活動」に注目することで、正課および正課外に様々な関わりをもっている大学生の多様な態度や意識を把握することができる。2013年に調査したデータを用いて、大学生文化の分化が確認できた。

### 7.2. 考察

大学生文化の分化がみられていることはわかった。それでは、この結果から何を考えるこ

とができるのだろうか。大学生文化の分化が機能する条件を考察する。ここでは学生個人の立場と大学運営側の立場の2側面から「部・サークル活動」が果たす役割を検討する。

学生個人の立場からは「部・サークル活動」への参加／不参加と活動継続と停止については学生個人が決めるものであるという前提を忘れてはいけなだろう。大学に所属する以上、正課である授業科目の履修は必須だが、正課外についての制約はない。学生生活をどのようにデザインするかは学生に任されており、どの活動に加入し、どの比重で関わるかも自由である。ただし、活動内容、組織・集団内に関わる以上、何らかの制約は出てくる。自由と制約の中で、個人にとってよりよい解答を思考し、実行していくことが問われる。「部・サークル活動」とは、在学期間中に自分は何を優先するのか、すべての学生にその選択機会を用意しているといえる。

大学運営側の立場からは「部・サークル活動」の支援（横山、2011）のあり方が重要となる。まず、大学内にその活動環境が用意されていることで学生の希望を満たすことができる。また、多様な環境があればそれだけ学生の選択機会を増やすことができる。次に環境を用意しただけでなく組織としての具体的な支援策（活動場所の確保、予算、参加学生へのケア、管理責任体制など）の内容および姿勢が問われる。正課ではない活動に大学として何をどこまで支援するかといった明確な「ミッション・ビジョン・バリュー」が必要（大島・浜島・清野、2013）となる。つまり、学生の選択機会を大学としてどこまで保障するかである。

「部・サークル活動」に関与できる条件が存在し、それが学生および大学運営側に理解されることで大学生文化は分化し、多様な学生が学内で活動することにつながる。現在でも「部・サークル活動」への関わりはインフォーマルながらもキャンパスライフに大きな影響を及ぼす。インフォーマルな側面からの多様な学生たちの関わりに注目していく必要がある。

## 8. おわりに

以上、本稿は大学生文化研究において正課外活動のひとつである「部・サークル活動」に注目し、正課外活動に関わる（あるいは関わらない）大学生たちの態度と意識を正課である学業（勉強）と絡めた6タイプを作成し、大学生文化の分化を確認した。大学生にとって「部・サークル活動」は大学内ではインフォーマルでありながらも、ときにはフォーマルなもの以上に比重を置く活動となっている。大学生文化の分化を維持するためにも、大学内で「部・サークル活動」が果たす役割は重要と位置づける。

大学生文化研究は大学生を対象にして、研究者が関心をもった時代、地域、手法を駆使して、彼らの生活様式や価値意識を明らかにすることにその意義がある。今回は「部・サークル活動」を正課外活動のひとつとして大括りにして論じたが、学外のアルバイト、個人の趣味活動なども研究対象となる。また、これまでの「部・サークル活動」が大学内でどのような歴史や経緯をもって発展もしくは衰退したのかは検討できなかつた。これらは今後の課題である。多様な側面、研究視点から大学生文化にアプローチし、多くの研究蓄積が期待される。

## 註

- 1) さまざまな団体名称等あるがここでは「部・サークル活動」と統一して扱う。「部・サークル活動」を大学内および大学間を問わず、かつ公認・非公認をも区分けることもなく、大学生が所属する正課外での団体・集団・組織活動と位置づける。
- 2) たとえば、正課に関わる学習を正課外の時間で支援する施設（ラーニング・コモンズ）利用者の学習成果について検討した論文がある（浜島・鈴木・岡部、2015）（浜島・岡部・鈴木、2016）（浜島・岡部・鈴木、2017）。
- 3) 全国大学生生活協同組合連合会は毎年報告書を刊行している。毎年1回実施しており、部・サークル活動の加入状況も継続して尋ねている。これまで51回の調査実績がある（全国大学生生活協同組合連合会、2016）。
- 4) 高田は新井・松井（2003）に即して「サークル集団」と呼称している。
- 5) 浜島（2017）ではこの8タイプ別に「今の大学に入ったこと」の満足度を分析している。
- 6) 本データを再分析した論文に浜島（2016）および浜島（2017）がある。
- 7) 「大学生文化研究会」は1997年より、4時点にわたって調査を実施している。2013年に調査した14大学のうち、1997年、2003年、2007年にも調査回答のあった7つの大学（A、C、D、F、G、J、L）を取り出し、これを全体サンプルとみなし、時点間の比較をおこなってみる。なお本データを使用した分析に浜島（2015）および浜島（2017）がある。「部・サークル活動」に関連した結果も参考までに以下、紹介しておく。

### 「部・サークル活動」学生は減ったのか？

4時点それぞれの加入の有無である（表7）。「部・サークル活動」に加入しない学生は各時点とも存在するが、2013年では最も少ない。多くの学生が加入している。

表7 調査年別 加入の有無

調査年	加入している	途中で辞めた	最初から未加入	N(100.0)
1997年	63.2%	18.8%	18.0%	952
2003年	66.8%	16.1%	17.2%	1393
2007年	68.7%	14.7%	16.7%	1309
2013年	76.7%	12.1%	11.2%	1060

### 種別に変化はみられるのか？

「文科系の部、サークル」、「運動系のサークル（同好会）」参加者が3～4割と多くなっている。また「運動系の部（体育会）」所属者も2割前後いる（表8）。2013年の特徴としては「社会活動関係の部、ボランティア団体等」参加者が1割を超えた。

総じてみれば4時点で参加種別に大きな変化はみられていない。

表8 調査年別 加入者種別構成

調査年	運動系の部 (体育会)	運動系のサークル (同好会)	文科系の部、 サークル	社会活動関係の 部、ボランティア 団体等	その他	N(100.0)
1997年	22.9%	33.9%	33.6%	7.0%	2.7%	602
2003年	17.8%	35.2%	33.1%	8.9%	4.9%	930
2007年	17.2%	34.5%	34.8%	9.2%	4.2%	899
2013年	18.6%	26.9%	38.0%	15.7%	0.7%	813

**活動比重は弱まったのか？**

大学生活の中で「部・サークル活動」参加者の活動への比重（「高い」と回答した割合）をみると、多少の増減はあるが大幅な変動はない（図2）。大学教育改革は学業中心に進められているが、学生の課外活動の比重は大きい。

**他の活動比重との比較は？**

同様に他の活動比重をみたところ、各時点においても「友人との交友」が最も高く、以下、「部・サークル活動」、「学業、勉強」、「アルバイト」の順となっている（図2）。

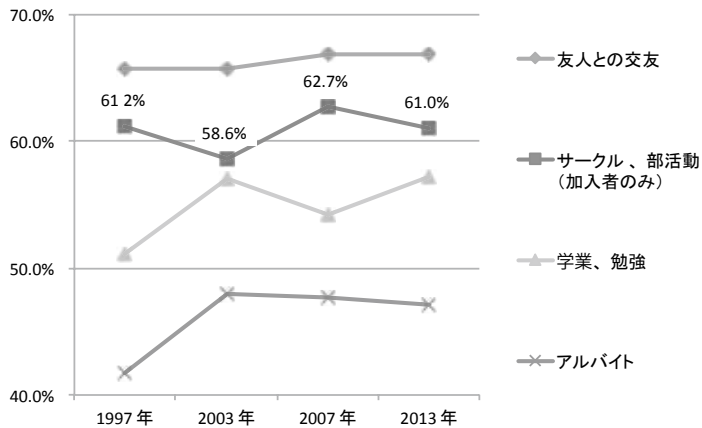


図2 調査年別 各項目の比重

**活動種別別の活動比重の変化は？**

「運動系の部（体育会）」（図3）所属学生の活動比重は一貫して80%を超えている。2007年において「社会活動関係の部、ボランティア団体等」の活動比重が高まっているが、総じて、「文科系の部、サークル」、「運動系のサークル（同好会）」、「社会活動関係の部、ボランティア団体等」の順に比重割合が高い。

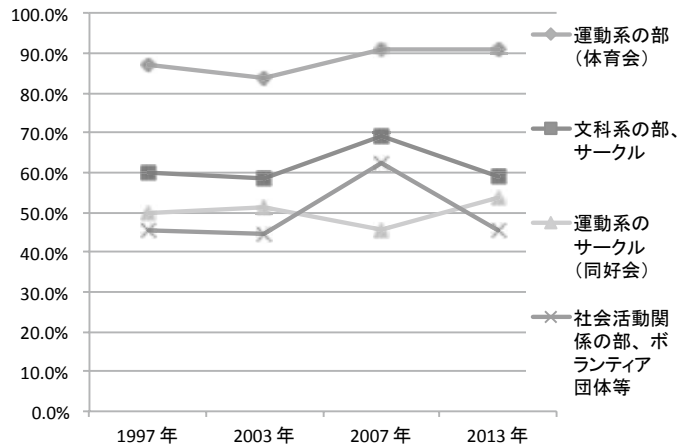


図3 調査年別 種別別活動比重

8) 時間を尋ねた際の選択肢は「ほとんどしない(=0)」、「30分くらい(=30)」、「1時間くらい(=60)」、「2時間くらい(=120)」、「3時間くらい(=180)」、「3時間以上(=240)」の6件である。選択肢を(=■)の分単位の数値に置き換えて分析で使用する。平日の「授業の予習・復習をする」時間の分析は浜島(2017)がおこなっている。

9) 大学観は下記のように質問している。

Q 大学について、いろいろな意見がありますが、あなたはA~Eのそれぞれについてどちらの意見に賛成ですか。あなたの意見に近いほうに○をつけてください。

- A 1 大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ。  
2 大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である。
- B 1 単位が楽に取れる科目を選択したい。  
2 単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい。
- C 1 大学での授業も出席を厳しくとるべきだ。  
2 出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ。
- D 1 大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ。  
2 大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい。
- E 1 学生の生活や学習について、大学の先生は指導したほうがよい。  
2 学生の生活や学習について、学生の自主性にまかせたほうがよい。

## 参考文献

- 赤間健一, 2013, 「友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度、動機づけの関連の検討」, 『京都学園大学人間文化学会紀要 人間文化研究』, 30号, pp.51-73.
- 新井洋輔・松井豊, 2003, 「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」, 『筑波大学 心理学研究』, 第26号, pp.95-105.
- 浅野智彦, 2011, 『趣味縁からはじまる社会参加』, 岩波書店.
- 浜島幸司, 2014, 「大学生の大学滞在時間—4時点(1996年・2001年・2006年・2011年)の比較から—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.4, pp.99-113.
- 浜島幸司, 2015, 「4時点における学生の「生徒化」と大学の「学校化」の検討—1997年・2003年・2007年・2013年データの比較から—」, 武内清(研究代表), 『現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究—学生の「生徒化」に注目して—』, 平成24~26年度科学研究費研究補助金(基盤研究(C))研究成果最終報告書, pp.57-68.
- 浜島幸司, 2016, 「子ども期の家族との経験が高校生活・大学生生活に与える影響—大学生アンケート調査分析から—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.6, pp.109-121.
- 浜島幸司, 2017, 「大学生の学業比重の分化に関する考察—2013年14大学調査データの再分析—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.7, pp.79-92.
- 浜島幸司・鈴木夕佳・岡部晋典, 2015, 「良心館ラーニング・commonsの高頻度利用者の学習特性」, 『同

- 同志社大学 学習支援・教育センター年報, 第6号, pp.3-27.
- 浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳, 2016, 「ラーニング・コモンズが学生にもたらす学習成果—同志社大学良心館 LC 利用アンケート調査から—」, 『同志社大学 学習支援・教育センター年報』, 第7号, pp.3-24.
- 浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳, 2017, 「ラーニング・コモンズ内のエリア別利用傾向と学習成果—同志社大学良心館 LC 利用アンケート調査から—」, 『同志社大学 学習支援・教育センター年報』, 第8号, pp.3-19.
- 岩田弘三, 2003, 「サークル文化のあゆみ」, 武内清編, 『キャンパスライフの今』, 玉川大学出版部, pp.219-241.
- 岩田弘三, 2011, 「キャンパス文化の変容」, 稲垣恭子編, 『教育文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.26-53.
- 岩田弘三, 2015, 「『大学の学校化』と大学生の『生徒化』」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.5, pp.65-87.
- 岩田弘三・黒河内利臣, 2010, 「設置者別にみた学生生活費と学生文化の推移—全国大学生生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』データをもとに—」, 『私学高等教育データブック2010』, 私学高等教育研究叢書, pp.11-42.
- 泉谷道子・山田剛史, 2013, 「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」, 『大学教育実践ジャーナル』, 愛媛大学 大学教育総合センター, Vol.11, pp.61-67.
- 北本遼太・茂呂雄二, 2017, 「大学生のサークル活動におけるコミュニティ維持に関する質的検討」, 『筑波大学 心理学研究』, 第53号, pp.13-21.
- 小西啓史・野沢久美子, 2013, 「大学生の場所愛着に関する一考察(2)」, 『武蔵野大学 人間科学研究所年報』, 第3号, pp.15-22.
- 黒河内利臣, 2015, 「『生徒化』した学生の授業への期待」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.5, pp.101-117.
- 松繁寿和, 2005, 「体育会系の能力」, 『日本労働研究雑誌』, No.537, pp.49-51.
- 大島勇人・浜島幸司・清野雄多, 2013, 『学生支援に求められる条件—学生支援 GP の実践と新しい学びのかたち—』, 東信堂.
- 大島真夫, 2012, 『大学就職部にできること』, 勁草書房.
- 大島真夫・伊藤素江・浜島幸司, 2007, 「コミュニティとしての大学—21 大学調査から—」, 武内清(研究代表), 『現代大学生の生活と文化—学生支援に向けて—』文部科学研究補助金最終報告書(課題番号:13660167), pp.16-31.
- 清水和秋・三保紀裕, 2013, 「大学での学び・正課外活動と『社会人基礎力』との関連性」, 『関西大学 社会学部紀要』第44巻, 第2号, pp.53-73.
- 高田治樹, 2014, 「大学生サークル集団への態度の探索的検討—否定的態度を含めた態度パターンの分類—」, 『青年心理学研究』, Vol. 26, No.1, pp.29-46.
- 高田治樹, 2015, 「大学生サークル集団研究の意義と課題—吉村氏のコメントに対するリプライ—」, 『青年心理学研究』, Vol. 27, No.1, pp.87-91.
- 武内清(研究代表), 2015, 『現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究—学生の「生徒化」に注目して—』, 平成24~26年度科学研究費研究補助金(基盤研究(C))研究成果最終報告書.
- 武内清・浜島幸司, 2003, 「部活動・サークル活動」, 武内清編, 『キャンパスライフの今』, 玉川大学出版部, pp.31-41.
- 谷淵真也, 2015, 「大学生の居場所感と学校適応感の関連」, 『比治山大学紀要』, 第22号, pp.65-73.



- 田澤実・梅崎修, 2011, 「大学生活への意欲と達成が自尊感情に与える影響—大学1年生に対する縦断調査—」, 『京都大学 高等教育研究』, 第17号, pp.67-71.
- 時任隼平・久保田賢一, 2012, 「卒業生を対象とした正課外活動の成果とその要因に関する研究」, 『日本教育工学会論文誌』, Vol.36, No.4, pp.393-405.
- 辻泉, 2016, 「若者たちのパーソナル・ネットワークと『趣味縁』—2007YCRG 杉並調査の結果から—」, 『大妻女子大学 人間関係学部紀要 人間関係学研究』, 17号, pp.145-162.
- 山口晶子, 2015, 「大学生の趣味とキャンパスライフ—オタク趣味に関する女子学生へのインタビュー調査から—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.5, pp.119-135.
- 横山孝行, 2011, 「大学のサークル支援に関する一考察」, 『東京工芸大学 工学部紀要』, Vol. 34, No.2, pp.8-14.
- 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部編, 2016, 『CAMPUS LIFE DATA 2015 第51回学生の消費生活に関する実態調査』, 全国大学生生活協同組合連合会.